

【熊本国税局長賞】

復旧後に見える未来へ

出水市立米ノ津中学校

三年 瀬野浦 百々香

二〇十六年四月十六日。「ガタガタ」と大きな音が家中に響き渡ると共に地震速報が鳴りやまない夜の九時。毛布に包まれた私と弟の手をぎゅっと強く握りしめた母。これはただ事ではないと焦る私を優しい声で諭してくれた。揺れが収まると毛布から顔を覗せた。私の視界にはびっくりするほど荒れ果てた部屋が目映った。特に印象深いのは冷蔵庫が玄関にあった事だ。とりあえず母の指示に従い外に出た。改めて地震の想像を絶する恐怖を思い知らされた。どこを見渡しても崩れている建物や山が私の目の奥底を刺激した。当時私は熊本の小学三年生。二日後に迫った遠足は小学生ながら楽しみで仕方なかった。そんな中、熊本地震と呼ばれる大きな揺れが私たちを襲った。それからというもの、毎日地域の体育館や公民館などで夜を過ごした。友人との会話には不安の声が飛び交った。いつもなら笑えることも上手に笑えなかった。「またあの日のように地震が起きるのではないか」私は何度も怖くなった。だが家族や友人の支えで立ち直ることができた。朝昼晩の食事・日用品などは支援物資で補った。その他にも様々なサポートを受けた。例えばお風呂は自衛隊の方が設けてくれたビニール風呂や地域の温泉施設を借りて地域社会全体で助け合った。ボランティアの方々が瓦礫の撤去を手伝ってくれたこともあった。

現在では復旧作業が進み、美しい景色が広がっている。家の近くにあった橋も六年の歳月を経て復旧をとげ、今では観光スポットとして名を連ねている。そこで川流と少し崩れた山肌を見ると、昨日の事のように鮮明に嫌な記憶が蘇ってくる。辛い思い出は一生消えることはない。だが周りの施設はどうだろう。地震があつたなど感じさせないくらいにキレイに整備されている。

一般的には「税」と「災害」は無関係だと思われるが実は災害にも税が役立てられていた。災害復旧費と呼ばれる費用。それは、学校・施設や道路などが災害により破損した場合の復旧のために使われている。また、災害派遣に使われることもある。その費用に充てるお金があるのは国民が払っている税が存在するからだ。自分から見える景色は税によって保たれているといっても過言ではない。

私は三年前から鹿児島に住んでいる。景色は見とれてしまうほど美しいし、建物や道路も整備されている。再び心が温まった。

「税を払うのは大変なことだが必ず人の役に立つ」大きくなったら自分に言い聞かせ、「税を絶対に納めよう」と自分に誓った。もし、災害が起きた時、復旧後に見える未来へ繋ぐため私たちは税を受け継いでいく必要がある。社会の一員として少しでも国に貢献したい。年々地震の爪跡が消えていくにつれその思いも強くなっている。私は大きな額の税は払えない。未来を変える税だからこそ私はそんな税を払う人が輝かしくてみえてくる。